



TITLE:

津田浩司. 『「華人性」の民族誌  
一体制転換期インドネシアの地方  
都市のフィールドから』世界思想  
社, 2011, 373p.

AUTHOR(S):

貞好, 康志

---

CITATION:

貞好, 康志. 津田浩司. 『「華人性」の民族誌一体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』世界思想社, 2011, 373p.. 東南アジア研究 2011, 49(1): 154-157

ISSUE DATE:

2011-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151868>

RIGHT:

Muslims for undermining the morality of their communities. Short on a deeply historical analysis of these (and other) issues, the book may give the false impression that Thaksin's "regime" (as opposed to the "state" — McCargo tends to conflate the two concepts) is largely to blame for the upsurge in violence.

Contrary to its claims, the book also takes a rather simplistic view of state "legitimacy." Every state enjoys varying degrees of legitimacy in different policy areas and at different points in time. In McCargo's formulation, however, Malay-Muslims seem to have viewed the Thai state as illegitimate across board and across time. On issues of security, religious education, and political recruitment, the state may be illegitimate (as McCargo claims), but what about other schemes, such as social welfare, infrastructure development, and scholarships, from which a sizeable number of Malay-Muslims have benefited, albeit to varying degrees, over the years? These issues are not explored in the book.

The book, moreover, tends to make a jump from state illegitimacy to the occurrence and persistence of violent conflicts. According to McCargo, the militant movement has now found many active and passive sympathizers in the Malay-Muslim population. In some areas, they "constitute more than half or two-thirds of the population" (p. 186). But it is unclear why these people support or condone the violent movement, given the fact that it has attacked innocent civilian Muslims in recent years. Seeing the state as illegitimate is one thing, but supporting the use of violence is another. If many Malay-Muslims view the state as illegitimate, they should view the violent movement as equally illegitimate. My educated guess (based on my brief stay in the three border provinces) is that most ordinary Malay-Muslims are willing, if not totally happy, to be part of the Thai nation-state. They remain neutral between the state and violent conflicts; they support neither side. They may oppose some types of "regimes" (e.g., Thaksin), but they do not necessarily shun the "state" altogether.

Finally, the book provides little theoretical and comparative analysis. What little theoretical discussion

it provides draws primarily on Mohammed Hafez's work without addressing the voluminous literature on insurgency and communal violence. How does the Thai case illuminate this literature? Similarly, McCargo unfortunately fails to cast the Thai case in comparative perspective. The existing literature, he laments, is "highly case specific" without offering "systematic comparative perspectives" (p. 10). This critique can be turned against him, too. Is the Thai case similar to, or different from, other cases of insurgency movements or communal conflicts in countries like India, Indonesia, and the Philippines? It is a pity that he does not address these cases, for he presents an unparalleled amount of empirical materials.

These comments notwithstanding, McCargo has produced just another "must" book for anybody interested in Thai politics. The way he situates the violent conflicts in the nature of interaction between the center and periphery is particularly illuminating. This book sets the bar high for those currently working on the important topic of Muslim insurgency in southern Thailand.

(Yoshinori Nishizaki; 西崎義則 · Department of Political Science, National University of Singapore)

津田浩司. 『「華人性」の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』世界思想社, 2011, 373p.

本書は、現代インドネシアにおいて華人が「華人である」ということ、すなわち一つのエスニシティとしての「華人性」が人々に意識され、社会的に立ち現れる諸局面について、スハルト体制の終焉（1998年）をはさむ約10年間に中部ジャワ北岸の町ルンバン周辺で起きた出来事の聴き取りと参与観察をもとに叙述・分析した研究である。著者津田氏が2002年から2年間ルンバンを拠点に行った臨地調査を基礎とし、2008年東京大学大学院総合文化研究科に提出された博士論文がもとになっている。なお、本書にいう華人とは国籍の別などにかかわらず広く中国系住民を指す総称である。

本書は全4部17章と「むすび」から成る。第1部は序論、第2部から第4部までが三つのトピックを扱った本体である。ここではまず、各部の概要をみてゆこう。

序論では著者の問題意識と狙いが示される。いわく、インドネシアに限らず従来の華人研究では、華人が華人としての何らかの核（儒教精神や家族主義、関係guanxiや信用xinyongなど）や、中華文明を担うものとしてのアイデンティティを「あらかじめ」持っているかのような本質主義的議論が横行してきた。ある人が「華人であること」の論拠として抽象的に語られる「華人性」とは何か、それは本当に「常に／すでに」存在するものなのか？かかる問いから出発した著者は、「華人性」を抽象的にでなく、個別具体的に捉えることに徹する、と宣言する（p.2-3）。およそ400世帯から成るルンバンの「華人コミュニティ」を足場に、「当人らが『華人』であるための核、ないしアイデンティティの拠り所となるような『華人性』をあらかじめ指定するのではなく、逆に『華人性』なるものがそれら人々の生活の場で立ち現れ、また意識化されていく過程を微細に描き出すこと」が狙いとされる（p.5）。またそのように「諸々の文脈を丁寧に追っていくことで、現象としての『華人性』を取り巻く様々な社会関係や制度をも照らし返していくことができる」（同）、というのが著者の見通しである。

第2部では、ルンバンにある二つの寺廟、慈恵宮と福德廟の法的地位をめぐる生じた事象がとりあげられる。スハルト体制期、「同化政策」下に置かれた華人は宗教の領域でも公の場で「中国らしさ」を表出することが著しく制限された。他方では全ての国民が国家公認宗教（イスラーム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー、仏教）の一つを奉じることが求められた。この結果、インドネシア各地の中国式寺廟（クレンテン）の多くは、公認宗教の一つである仏教の傘下に入ることにより、安定的な地位の保全を図るのが大勢だった。ところが、ルンバンの二寺廟は1995年、それまでの「仏教施設」としての地位を捨て、あえて「中国の伝統的慣習に基づく施設」すなわちクレンテンを名乗るようになる。スハルト体制期には異

例といえるこの地位変更がなぜどのように起きたのか、著者は関係する人々の様々な思惑や社会的関係、「仏教施設」化ゆえに生じた軋轢とその解決のための合議・交渉過程を詳細に調べ、彼らがあえて寺廟の「華人性」を主張するようになった謎を明らかにしてゆく。同時に、ルンバンの華人たちがスハルト体制下の対華人政策や宗教政策への対応を繰り返す中で、町の「華人コミュニティ」のまとまりが具体的に「寺廟を支える人々の集まり」として近似的に意識化されていったさまを描く。

第3部では、スハルト体制崩壊前夜、全国的に広がった反華人暴動の波がルンバン周辺にも及んでくる中で、「狙われる者＝華人」としての自覚を否応なく迫られた華人商店主たちが、水面下で独自の自衛組織を作りあげてゆく過程を追う。このインフォーマルな「影の組織」が、やがてルンバンの「華人コミュニティ」全体を包摂するものへと一元化されてゆくのみならず、近隣の町々の華人たちとの連絡体制を模索してゆく中で、広域的な「ネットワーク」が構築されるさま、さらに情勢の安定に伴い、「影の組織」やネットワークが消滅するまでが丹念に跡付けられる。その企図は「日常的な対面関係の連なりを一步も二歩も超え出るような関係性の成立と破綻という一連の過程を見ていくこと」（p.58）であり、それを通じて読者は著者と共に「改めて日頃この地方小都市に暮らす華人たちが抱いている『コミュニティ』のあり方、そしてその想像世界の広がりをも具体的に捉え返していく」（同）ことになる。

第4部では、ポスト・スハルト期、首都を中心結成された全国規模の華人団体主導のもと、華人もジャワ人やスダ人と同様この国を構成する重要なエスニック集団の一つであることを主張する動きの一環として、ルンバンや近郊の町ラセムの寺廟で祀られていた18世紀半ばの対オランダ反乱の伝説的指導者、陳・黄姓を持つ両人物（以下、神格化された名である陳黄武先生）を、インドネシア政府の認定する（華人初の）「国家英雄」に推挙する試みの顛末が詳しく追究される。陳黄武先生に関する民間伝承史料の「再発見」、その史料がジャカルタの華人団体関係者や地元有力者の手を経る中で、陳黄武先生こそ「華人対プリブ

ミ」や「華人対ムスリム」という二項的対立を乗り越える理想的人物だとみなされてゆく過程、さらにインドネシア華人全体の地位向上を狙ったこの「華人の国家英雄」推戴運動が、中央と地方のやり取りの中でいかなる結末をたどったかが語られる。本件を通じ浮かび上がるのは、体制転換直後のインドネシアで「華人性」が高らかに主張される一般情勢の中、「その主張の母体となるべき『華人』の広がりというもののがどのように捉えられているのか、中央の華人団体、および地元の有力者とそれを取り巻く一般の生活者それぞれの間にある感覚の違い」(p.59-60)である。

以上のように僅かな字数で要約することにためらいと困難を感じるほど、本書は内容豊かな民族誌である。当初の目的であった『「華人性」が人々の生活の場で立ち現れ、また意識化されていく過程を微細に描き出すこと』、および『「華人性」を取り巻く様々な社会関係や制度をも照らし返していくこと』は十分に達成されている。標題にも表れている通り、本書は第一義的に「華人性」の民族誌的叙述を目指したもののだが、その「華人性」の立ち現れ方の描写を通じ、元々は分析の足場として仮定された「華人コミュニティ」の動態的な諸相を把握・叙述することにも、結果的に成功していると思う。

その成功因はいくつも考えられるが、何より「華人性」の表れや取り扱われ方を何らかの出来事、つまり「事件史」の中に見出した手法にあるだろう。三つの事件はいずれもジャカルタを中心にした政治史からは見えてこない、しかしローカルな現場の華人たちにとっては一大事の出来事である。私事ながら評者は著者にやや先立つスハルト体制末期、同じ中部ジャワのスマラン市で、著者と同じく草の根の社会における「華人性」の表れ方を把握することを目指し調査をした経験がある。だが、人々と日常の時空間を共にすればするほど、彼らの「華人性」は自明のことと感じられるようになってしまい、本書はどうも日論を組み立てるには至らなかった。日常と非日常の臨界面に生じる「事件」に際してこそ、華人社会の内外で「華人性」(より一般的にはエスニシティ)をめぐる応

酬が露わとなり、ひいては観察・記述可能になることを本書に教えられた。

良く読めばわかるように、取りあげられた三つの事件のうち、最初の二つは実は著者がフィールドに入るより数年前に起きた出来事なのである。そのことを忘れてしまうほど、いずれも意外な方向に展開する事件の叙述は臨場感にあふれている。一見些細とさえ思える事柄に潜んだ問題の広がりを感じ掘り下げていった嗅覚(特に第2部)、反華人暴動の生々しいディテールや微妙な人間関係、裏金の流れなど相当センシティブな事柄まで人々に胸襟を開いて語らせた信頼関係の醸成(特に第3部)、多層的・多面的な「歴史」の生成についての深い洞察(特に第4部)などの賜物であろう。著者にとってこれが初めての本格的なフィールドワークであったことを思えば「天賦の才」を感じさせるが、人々とやりとりを重ねる中でここぞという勘所を捉え、時間をかけて粘り強く聴き取りを行った努力が推し測れる。僅かな糸口から、「華人性」をめぐる展開する豊かな事象を再構成し、「読んで面白い」物語にまで仕立て上げた表現力(演出に富んだ構成力、論理的で正確な文章力)にも感嘆する。評者はたまたま本書の成る数年前から著者の草稿を読む機会に恵まれたが、人類学という「分厚い記述」とはこのことか、と脱帽するばかりだった。その後補足調査を重ね、満を持して刊行された本書では、「分厚さ」にいつそう磨きがかかり、かつ論点が無駄なく整理し直され、読みやすくなっている。

本書が傑作であるだけに、惜しまれる点がないわけではない。一つは、中心主題である「華人性」の定義がやや曖昧なことである。私見では、「華人性」(ひいてはエスニシティ一般)には、ある人が「華人である」という帰属性と、華人という集団カテゴリーに付与される特性(ステレオタイプを含む)の少なくとも二つの次元があると思われるが、本書ではそれらが明確に区別されぬままこの言葉が使われているきらいがある。また、考察の出発点となる問題意識の説明箇所では筆者の指摘するほど、近年の華人研究においてなお本質主義的議論が横行していると言えるか、少し疑問を感じた。インドネシア人自身によるインドネシア華人研究

に限っても、Hamzah 編著書 [1998] や Wibowo 編著書 [1999; 2000] に収められたいくつかの論考や Heryanto [1998] などは、ニュアンスの違いはあれ、構築主義的な立場から「華人性」を捉えようとしている。序論では、これら「本質主義的ではない」諸研究の達成した地平と本書との関係も語って欲しかった。もう一つ、参与観察・聴き取り調査の対象や叙述の重心が寺廟に集まる中高年層に置かれ、ルンバン華人コミュニティの相当部分 (p.269 の註 18 によれば 65.8 %) を占めるキリスト教徒、特にプロテスタント信者 (同 29.5 %) や若年層の記述が薄い。後者の人々にとっての「華人性」がいかなるものなのか、今後探究されるべき課題の一つに挙げられるだろう。

いずれにせよ本書は、骨太にして緻密な、完成度の高い作品である。このような世界的にも水準の高い華人研究がわが国の東南アジア学界から生みだされたことは喜ばしい。単に華僑華人研究者のみならず、インドネシア、東南アジア社会、あるいはエスニシティやマイノリティの問題に関心のある読者に広く深く読まれる価値がある。

(貞好康志・神戸大学大学院国際文化学研究科)

# 言及文献

- Hamzah, Alfian, ed. 1998. *Kapok Jadi Nonpri: Warga Tionghoa Mencari Keadilan*. Bandung: Zaman Wacana Mulia.
- Heryanto, Ariel. 1998. Ethnic Identities and Erasure: Chinese Indonesians in Public Culture. In *South-east Asian Identities: Culture and Politics of Representation in Indonesia, Malaysia, Singapore and Thailand*, edited by Joel S. Kahn. Singapore: ISEAS.
- Wibowo, I., ed. 1999. *Retrospeksi dan Rekontekstualisasi "Masalah Cina."* Jakarta: Gramedia Pustaka Utama, atas kerja sama dengan Pusat Studi Cina.
- , ed. 2000. *Harga yang Harus Dibayar: Sketsa Pergulatan Etnis Cina di Indonesia*. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama, atas kerja sama dengan Pusat Studi Cina.